―文化の薫る活力ある地域づくりをめざして―　財団では、このような事業を行っています。

普及啓発事業

1. 財団ニュース「作州路」13 号の発行

2. 普及講座の開催
陶芸入門講座（8 回講座）
期　日／平成 21 年 5 月～ 12 月
会　場／勝央町公民館・工芸室　　参加者／ 25 名

「陶芸入門講座」の様子

青 blue 関連企画
日光写真・藍染め体験
期　日／平成21 年 8 月
会　場／勝央町美術文学館及びその周辺
参加者／ 6 名

3. 事業協賛に伴うＰＲ活動
金時祭花火大会への協賛

芸術文化活動事業

「第 6 回ミマサカコドモ絵画展」会場風景

1. 展覧会の実施
【主催事業】
■公募展の開催
公募展
「第 6 回ミマサカコドモ絵画展」
会　期／平成 22 年 1 月 6 日～ 2 月 7 日
会　場／勝央美術文学館 町民ギャラリー 1・2

【共催事業】
■企画展の実施
勝央美術文学館企画展への共催事業

«文学»
文学特別展　小説研究十六講―松本清張と木村毅―
小企画 22　額田六福寄贈資料速報展 3―青蛙房・岡本経一の仕事―
小企画 23　岡本綺堂没後 70 年

«美術»
「泥天神展」
「しょうおう発掘成果展 地中に眠るわが町の歴史」
コレクション展 Vol.21「郷土の画家ｼﾘｰｽﾞ 素描と淡彩Ⅵ」
こどもとおやのための企画Ⅳ
「岡山のむかしばなし絵本原画展」
「青・BLUE 中川智野・小林泰子・福田淳子作品展」
コレクション展 Vol.22
「郷土の画家シリーズ 小早川篤四郎とその周辺」
巡回展「第 32 回瀬戸内版画展」
「島田悠紀子展 “でこぼこ道” 心の旅」
コレクション展 Vol.23「郷土の画家シリーズ画家と旅」
公募展「第 6 回ミマサカコドモ絵画展」
「高原理佳・谷口愛・松尾静枝作品展」
「第 6 回陶芸教室の作品展」

2. 地域芸術文化振興事業
【主催事業】
■ピアノとチェロと語りによる宮沢賢治の世界
セロ弾きのゴーシュ
会　期／平成 21 年 9 月 12 日 (土)
会　場／勝央文化ホール

「セロ弾きのゴーシュ」の様子

【共催事業】
■博士の愛した数式
会　期／平成 21 年 11 月 16 日 (金)
会　場／勝央文化ホール
【助成事業】
勝央金時太鼓保存会活動
勝央町文化協会活動事業
【後援事業】
岡山フィルハーモニック管弦楽段
チルドレンズ・ライブ・ツアー 2009
ＳＵＮ蕊 Trinitas LIVE TOUR 2009 邦楽維新
岡山県大正琴の祭典
平成 21 年度公共ホール音楽活性化事業
第 5 回しょうおう町民音楽祭
横仙歌舞伎四季の公演＜冬＞

その他の事業

1．文化財資料収集保存事業
2．学術的研究及び図書の発刊事業等の事業を継続しておこなっております。

地域の文化活動を応援します。

当財団は、皆様のご寄付により一層充実した地域芸術文化振興のための活動を実施いたします。皆様のより一層のお志をお待ちしております。

岡本綺堂（おかもときどう） 著『半七捕物帳（はんしちとりものちょう）』と　額田（ぬかだ）やえ子翻訳脚本『シャーロック・ホームズの冒険』とその原稿

岡本綺堂は、勝央町勝間田出身の劇作家 額田六福の師にあたり、やえ子はその六福の長女。本や脚本が載っている文机は、六福が弟子入りの為上京した際、綺堂が六福に贈ったもので、六福の死後は、やえ子が愛用していた。背景は、出雲街道沿いに今も佇む六福の生家。この脚本でホームズの声を担当していた俳優の露口茂は、時代劇で半七役を演じたこともある。

『半七捕物帳』一巻と『シャーロック・ホームズの冒険』脚本ならびに原稿

編集後記

今年度は、岡本綺堂の没後 70 年にあたり、綺堂に関係する書籍の刊行が相次ぎました。なかでも、北村薫・宮部みゆき編『傑作選 読んで「半七」!』『傑作選 もっと「半七」!』（各ちくま文庫、2009 年）は、若い人たちに、手軽に読んでいただけるもので、時代物ファンは勿論、推理小説好きの方にも是非お勧めの本です。（E.N）

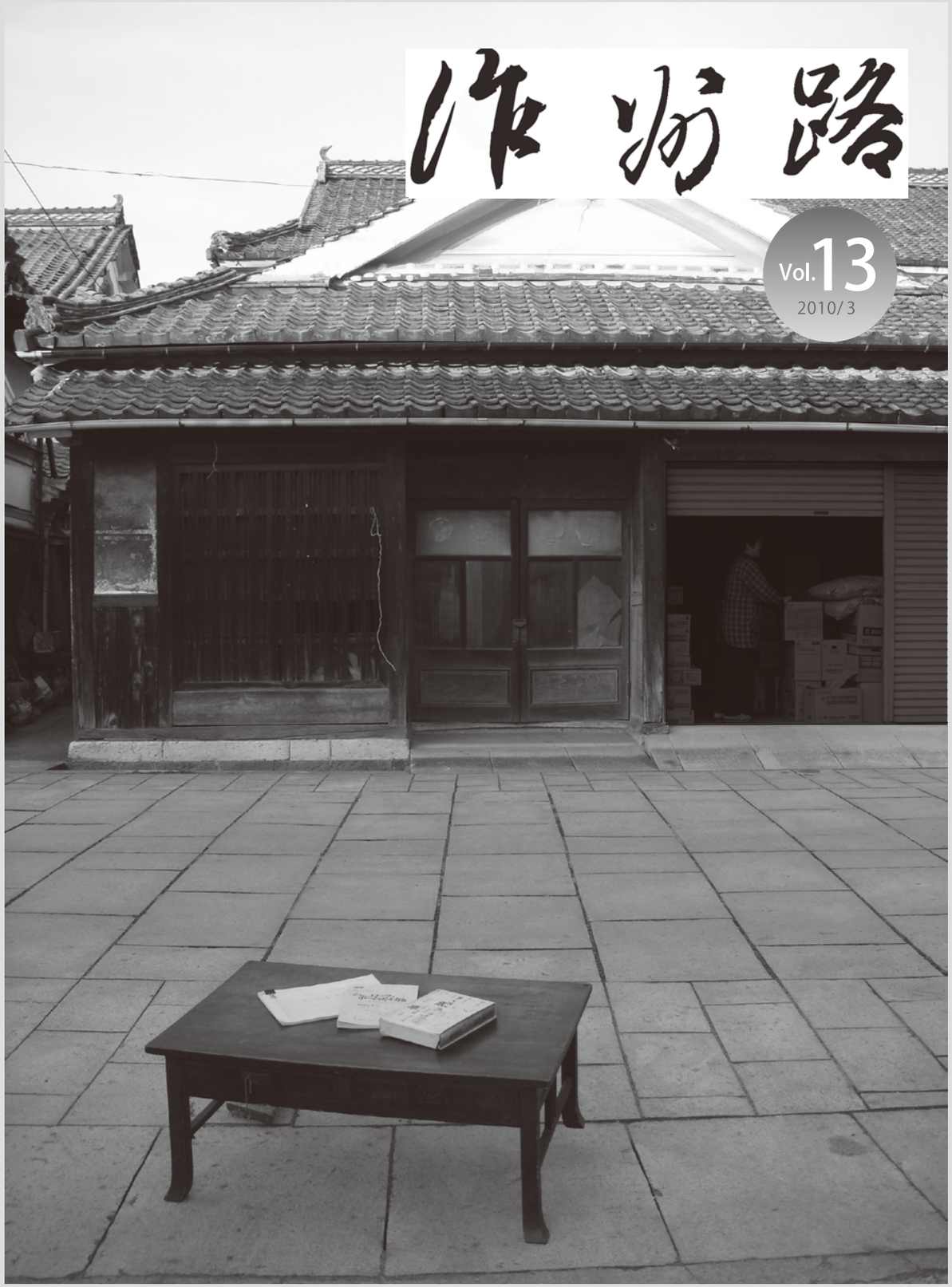
財団法人　美作学術文化振興財団
〒709-4316 岡山県勝田郡勝央町勝間田207-4　Tel. 0868-38-0270 ／ Fax. 0868-38-0260

発行日：2010 年 3 月 31 日
編集・発行：㈶美作学術文化振興財団
印刷：㈱廣陽本社

財団法人　美作学術文化振興財団

作州路

Vol.13
2010/3



岡本綺堂 著『半七捕物帳』第一巻（青蛙房刊）と、額田やえ子 翻訳『シャーロック・ホームズの冒険』脚本とその原稿（ＮＨＫ放映）。岡本綺堂は、この作品の第一話「お文の魂」で、あの有名な「日本のシャーロック・ホームズ宣言」をおこなっている。

神崎与五郎と勝間田宿、下山本陣

忠臣蔵といえば、赤穂浪士の復讐の物語で、全国津々浦々まで知れ渡っている。赤穂浪士が吉良邸に討ち入ったのが、元禄 15 年 12 月 14 日であったため、現在に至っても年の瀬が近つくと、必ずといっていいほどメデイアによって放映されている。

私が、太平洋戦争さなかに勝間田国民学校に在学していた頃、毎年 12 月 14 日には、先生に引率されて、黒土地区にある赤穂浪士の 1 人神崎与五郎の両親の墓参りをしていた。その頃から神崎与五郎が私たちの郷里で、家族と共に何年か過ごした後、播州赤穂藩に仕官したのだということが分かり、子ども心にも誇らしく思っていたものである。

神崎与五郎則休は、美作津山藩主森家に仕えていた神崎又市光則を父として、寛文 6 年（1666）津山城下で生れた。生母は元禄 3 年（1690）8 月病没し、津山市愛染寺に葬られている。

父は森家値段奉行を勤め、十三石三人扶持を給せられていた。美作津山藩も初代忠政、二代長継の時代は城の構築、大坂の役の出陣、各地の寺社造営などで、多額の出費が重なり、藩財政が窮乏していた。その建て直しができないままで、三代長武、四代長成に至り、重臣の専横も加わって、派閥争いは深刻となった。この派閥争いに嫌気がさして、離藩し、家族と共に美作勝田郡黒土村（現、勝央町黒土）に隠棲したのが、父の又市である。

又市の後妻（与五郎の義母）は美作勝田郡勝間田村（現、勝央町勝間田）の本陣下山家の娘である。美作津山藩の初代忠政は入国以来、治山治水、新田開発に積極的で奨励政策や助成を行った。勝間田平野も藩の助成で大規模な開田工事が行われ、その主役を務めた下山和十郎はその功績により、本陣にとりたてられた。下山家は黒土村に多くの田畑を所有していたので、父の又市は黒土村に移住したのである。そして、農耕のかたわら、村の子弟を集めて、猶水と号して寺子屋を開き、読み書きを教え、与五郎の薫陶にも努めていた。父又市には妹がいた。この妹が美作英田郡楢原村（現、美作市楢原）から、美作津山藩に仕官した箕作義林に嫁し、平太兵衛（箕作家医家初代）を産んでいる。

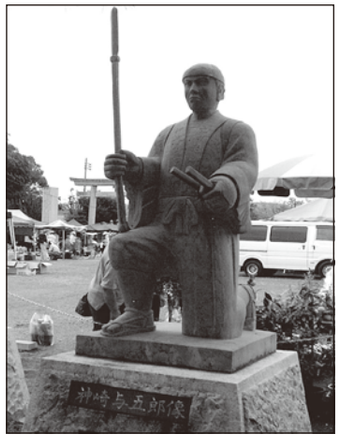
下山本陣の離れ座敷

与五郎は黒土村に転居後、まもなく、弟籐九郎に家督を譲って郷里を後にし、赤穂に赴き、播州赤穂浅野家に仕え、横目五両三人扶持を受けることとなった。この時父又市は、主君浅野内匠頭長矩の幼名又市郎をはばかって、半右衛門と改名している。これが赤穂浪士のさだめの序章である。

元禄 7 年（1694）跡目がなく、除封となった備中松山藩（現、高梁市）の城受けの際、主君浅野内匠頭の先供歩行を勤めたのが、与五郎の赤穂藩での最初の仕事であった。その後元禄 10 年（1697）美作津山藩も次期藩主が発病し、やむなくお取り潰しとなった。更に、元禄 14 年（1701）3 月 14 日、赤穂藩主浅野内匠頭が殿中において、吉良上野介義央に刃傷に及ぶという未曾有の大事件が突発した。内匠頭は即座に切腹、浅野家は断絶となり、赤穂藩を震憾させた。与五郎にとっては、備中松山藩城受け以来、10 年足らずの間に美作津山藩除封、播州赤穂藩断絶、そして、元禄 15 年（1702）の吉良仇討ちという波乱万丈の運命が待っていたのである。

与五郎は身分は低かったが、事件後の推移にともなう決議誓約等に迷うことなく、初めから大石内蔵助良雄の同盟に加わっていた。やがて、江戸の急進派の動きが激しくなった。その鎮撫と吉良家の偵察の必要から、与五郎に白羽の矢がたち、元禄 15 年 3 月、単身江戸に向かった。途中、箱根の宿場で、馬喰の丑五郎から馬のことで因縁をつけられ、堪忍袋の緒を締めて、詫び状一札を渡した話も有名である。吉田奈良丸（浪曲師）の得意の語り物に「義士伝神崎与五郎東下り」として、人々に喧伝された。昭和 27 年 10 月、吉田奈良丸が勝間田に来演した際、黒土地区にある神崎家の墓前に供花したことがある（勝田郡誌）。

4 月 2 日江戸到着。商人になりすまし、吉良家の様子を探った。9 月 19 日に「海山は中にありとも神垣の隔てむ影や秋の夜の月」と詠んでいる。その日はかって父子共に仕えていた津山藩の徳守神社の祭礼に当たっていた日で、あずま路の空に煌々と照り渡る秋の夜の月を眺めて、懐郷の感懐を詠んだものである。津山の徳守神社に歌の碑が建立されている。



神崎与五郎像（赤穂市大石神社　□）

与五郎には子どもがなく、赤穂藩士の妻の父も事件前に病死し、赤穂では妻とその母が那波（現、兵庫県相生市）の三木孫左衛門の世話になっていた。父母と弟は黒土の実家に在住。勝間田には伯父などの親族が在住していた。

討ち入りの前日まで、雪が激しく降った。「あづさ弓春近ければ小手の上の雪をも花の吹雪とや見ん」与五郎は短冊にこの歌をしたため、襟にはさんで、討ち入ったのである。首尾よく本懐を遂げたあと、三河岡崎藩（愛知県岡崎市）の藩主水野監物忠之のもとに預けられた。元禄 16 年 1 月 22 日に、自署親類書（別途掲載）を徴せられている。そして 2 月 4 日に「人はただ言はぬことをや恨むらん浮世の名さへ口なしにして」の一首を残して切腹「刃利教剣信士」という諡号で、江戸の泉岳寺に葬られた。時に 38 歳であった。

父半右衛門は与五郎が赤穂浪士として名をなした後、享保 2 年（1717）に病没、次の辞世を残している。「身に添ひしよつのもの皆払ひすて心はもとのすみ家へぞゆく」また、母は享保 15 年（1730）に没している。勝間田平野を見下ろす、国道 179 号線沿いの黒土地区の高台には、今も与五郎の父と母の墓が樹木に隠れるように、ひっそりと建っている。

木村 泰二（きむら・たいじ／勝央町 岡）

神崎与五郎 両親の墓

親類書

祖父･神崎三郎兵衛（森美作守様に相勤罷在、先年病死仕候）
祖母・角南弥三右衛門娘（先年病死仕候、弥三右衛門儀森美作守様に相勤罷在、先年病死仕候）
外祖父･下山六郎兵衛（森美作守様相務罷在、先年病死仕候）
外祖母・（下山吉左衛門方に罷在候、父之名覚不申候）
父・神崎半右衛門（森美作守様相勤只今浪人に而、作州勝田郡黒土村罷在候）
母・下山六郎兵衛娘（父一所罷在候）
弟・神崎籐九郎（浪人に而、父一所罷在候）
妻・河野九郎左衛門娘（播州赤穂指置候、九郎左衛門儀先年病死仕候）
伯父・下山吉左衛門（森美作守様に相務只今浪人に而、作州勝田郡勝間田村に罷在候）
伯父・下山源太兵衛（森美作守様に相務只今浪人に而、作州勝田郡之内に罷在候）
従弟・箕作平太兵衛（森美作守様に相勤只今浪人に而、当御地へ罷越候得共住所不存候）
以上
元禄 16 年 癸未 正月　神崎与五郎則休（花押）

＜参考文献＞
「日本及日本人」平成 10 年新春号